

編集委員が選んだ本

『格差社会と若者の未来』

全国民主主義教育研究会編／同時代社／
2007年8月／1575円

いま、続発する事態に追いまくられ、対症療法ばかり考えたり、量の多さや深刻さに絶望しがちではないか。

一方、いまどきの高校生の多くは、目先の利害に囚われ、「負け組」になるまいとだけ、考えがちではないか。

では、どうしたらいいか…と考えていた時、この本に出会った。

格差社会の現実のなかで、孤立化し、“自己責任”でものを考えがちだが、そうでない生き方は、どうしたら可能になるのか。ヒントになる学校づくりや政策は、日本やEUで、どう行われているのか。全国民主主義教育研究会の場で行われた、示唆に富む講演や、実践報告が集められている。行動する若者たちの姿もある。最後の書き下ろし論稿の『『がんばり』神話を超えて』にハッとさせられない教員は、少ないのではなかろうか。

『フツーをつくる仕事・生活術 28歳編』

新しい生き方基準をつくる会／青木書店／
2007年6月／2100円

競争、競争のなかで、人間が大切にされなくなっている。そんな社会でフツーに生きていくためには、新しい常識が必要ではないか。こうした問題意識から、本書には、「転職への状況の見極め方とその方法」「生活に困った時利用できる制度」「仕事や生活上のトラブル解決法」など、“駆け込み先”の紹介も含め、若者の視点に立つて、実に細やかにアドバイスが満載されている。

それらは、まっすぐに、どんな制度や、どんな社会を形成していったらいいか、という展望につながっている。

『史的検証 竹島・独島』

内藤正中・金炳烈／岩波書店／
2007年4月／2310円

日韓の歴史認識のズレのひとつが「竹島問題」であるが、韓国側の研究状況に比べて日本側のそれが著しく遅れていることを再認識させられた。

本書では、日韓双方の歴史研究者が①両国の固有領土説②1905年の日本編入問題③サンフランシスコ平和条約における竹島の取り扱いの3つの論点について、新史料なども踏まえながら、日韓両国の主張の歴史的根拠を検証していくという作業を行っている。

史料に誠実に向き合うことで、テーマのもつ政治性には絶対に左右されないという研究者の真摯な姿勢が伝わってくる。

『貧困襲来』

湯浅 誠／山吹書店／2007年7月／1575円

一読してハッとさせられることしきり。市場経済を万能と考える経済社会と自己責任論の思想社会の広がり、日本の中に「貧困」を拡大する結果を招いた。多くの人々がようやくその「凄惨な現実」を感じ始めている。その「凄惨な現実」を生み出した決定的で最大の転機は、2001年以降の小泉・安倍内閣の構造改革政策であろう。

すでに、高齢加算や母子加算の廃止といった生活保護の一層の改悪は進められ、政府が絶賛していた生活保護をめぐる「地域福祉の北九州方式」（生活保護受給者を減らす扶助・自立のあり方を提起し実行）などは、餓死や自殺に追い込む人を生み出してしまった（よって「ヤミの北九州方式」という方が正確である）。一方、3%から5%にアップされた分の消費税は、結局「法人税を下げた分の穴埋め」というごまかしであったが、さらに今なお、「社会保障を削るか、消費税を上げるか」というさらなるごまかしの論理が財務省などから提案されている。

著者は「社会保障給付の費用はこうやって調達する、財源はここからは持ってこない、と自分たちで決めておいて、そして『足りない』という。…子どもにガマンさせといて、父親は酒にパチンコに好き放題。二言めには『誰が稼いできてると思ってんだ』…と脅したり」の「ダメ親父的財言論」と同じだと指摘する。そして、「私たちにできる10のこと」を提言する。

「すべての人が人間らしく生きていける社会」をつくるためのヒントが詰まっている。

『鉄道忌避伝説の謎—汽車が来た町、来なかった町』

青木栄一／吉川弘文館／2006年12月／1785円

「鉄道が通ると宿場がさびれる」「蒸気機関車から出る火の粉で火災がおこる」などといって鉄道通過に反対した、という「伝説」は今でもよく耳にする。しかし、本当だろうか。

著者は戦後、各地で「地方史誌」が編纂され、その中で言い伝えが「史実」となり、学校で副教材などに取り上げられることによって「史実」が定着していったとみる。近世に繁栄し、古い歴史を有する町であったにも関わらず、鉄道のルートや駅から遠く離れたことによって衰微した例があるが、鉄道が「来る・来ない」には合理的な理由があり、それを明らかにしたのが本書である。日本近代における都市の発達と鉄道の役割を見直すきっかけともなる。